

## 令和4年度第2回ゼニガタアザラシ科学委員会

### 議事要旨

日時：令和5年2月14日（火）10：00～12：00

会場：TKP 札幌ビジネスセンター赤れんが前 カンファレンスルーム 5A

#### 議事1：令和4年度(2022年度)第2回えりも地域ゼニガタアザラシのモニタリング方法に係る作業部会からの報告

事務局より、資料1「令和4年度(2022年度)第2回えりも地域ゼニガタアザラシのモニタリング方法に係る作業部会からの報告」に基づいて報告した。

#### 議事2：令和4年度(2022年度)事業実施結果

事務局より、資料2-1「令和4年度(2022年度)えりも地域秋定置漁獲情報」及び資料2-2「令和4年度(2022年度)事業実施結果及び評価」に基づいて説明した。また、小林委員より、「2022年度環境省ゼニガタアザラシモニタリング調査報告」についてご報告頂いた。

##### 【主な意見】

- ・赤潮の影響により魚種が変化しているが、餌がある以上はゼニガタアザラシの個体数はあまり減らないだろう。一番望むのは漁業被害をいかに少なくするかである。去年、一昨年とサケの漁獲が非常に少ないが、昨年捕獲したゼニガタアザラシの胃内容の上位をサケ類が占めている。今後サケの漁獲が増えると被害が増えていくのではないかという懸念がある。これからもその辺の調査を十分して頂き、漁具等の工夫をアドバイスして頂きたい。
- ・今回の結果から、雄は75kg以上、雌は80何kg以上でないと繁殖に参加していない結果が出たが、その辺の基準はまだこれからも変わるという理解でよいか。
- ・繁殖個体が75kg以上ということであれば、50kgから調べなくてもいいのではないかと。  
⇒これまでの結果より、大体80kg以上で性成熟していると思っている。繁殖は栄養状態に左右されるため、50kgから調査していたが今後は対象をもう少し絞り込みたい。
- ・混獲数が多くなっており、その原因が溺死によるということだが、溺死は国際的には認められない安楽死法である。漁業の中で仕方なく死んでいくとしても、説明できるようにしておいた方がいいのではないかと。  
⇒意図的に溺死させることと漁業の混獲とは考え方が違うと思うが、海外で認められているかは調べる必要がある。また、アザラシ側の学習ということも考えながらやっていくということも一つ考慮する必要がある。
- ・環境省から定期的に説明して頂いているため、共存することに対して安心感はある。ゼニガタアザラシが繁殖できるよい環境なのであろう。しかし、人間にとってはマイナスになっている部分がある。小林先生には漁業者が安心して暮らせる地域になっていけるよう随時考えて頂いているため、大変感謝しており、今後も協力しながら付き合っていきたい。
- ・タコが少なかったということだが、赤潮の影響があるのか、またタコ漁の被害はどうなっているのか。  
⇒タコが赤潮の影響で死滅したのか、回避しているのかはよく分からない。漁獲量は少しずつ回復しているが、過去の実績の約1～2割である。
- ・これまでは大型個体がよくサケを食べていたが、今回、亜成獣もサケを食べていたということであったが、どういう状態のサケが胃内容物に入っていたのか教えてほしい。  
⇒今回、捕獲されてすぐに安楽殺ができないことが多かったため、消化されているものが多く、

- 丸ごとではなかったが、骨が出てきたり、一部の消化されたものを確認している。
- ・防除格子網をつけない時にはサケの被害がかなりあり、網をつけると被害がなくなったということは、被害防除効果は非常に高い。
  - ・換毛期に衛星発信機を装着することは難しいか。  
⇒7月頃に捕獲できれば換毛が進み可能だと思うが、6月は厳しい。  
⇒6月末までは定置網を実施しているため、ギリギリの時期に個体が確保できれば一番望ましいと思う。
  - ・もし換毛して発信機が外れてしまうのであれば、上陸率の調査であれば電波発信機や小型の衛星発信機を鰭につけるといった方法もあるが、考えていないのか。  
⇒電波発信機は受信機を設置するなど準備が大掛かりな割に、努力量に対して取れるデータが少ない。ワッペンでもある程度有効なので、今のところは考えていない。小型の衛星発信機は電池容量がかなり少ないかメーカーが限られるだろうが調べてみる。
  - ・水中映像の結果からも、格子網の設置を始めた2016年頃と比較すると、一昨年の映像では忌避する個体が増えてきているため、学習付けがされてきており、格子の効果が出てきていると思う。また、網が破られる事例が起きるが、現状使用しているダイニーマは同じ直径のワイヤーと同じ破断強度を持っているため、これ以上太くするとサケの入網にも影響が出てしまうと思うため、現状の素材でもうしばらく様子を見る必要があると思う。
  - ・漁業被害認識調査については、非常にいい形でやって頂いたと思う。事業者によって被害の大きさが違い、それによって意見が異なったり、共通していたりという点等もよく分かる。できれば今後も続けて頂きたいと思うが、一度やっているのだから、来年度以降はもう少し簡易的な形で実施できると思う。  
⇒漁業とアザラシが共存できる効果的な道を探していくためには、特に漁業者とも話し合いながら進めていくことになる。そういう意味では、漁業被害認識調査も非常に重要である。

### 議事3：令和5年度(2023年度)事業実施計画(案)

事務局より、資料3-1「令和5年度(2023年度)事業実施計画(案)」、資料3-2「令和5年度(2023年度)事業実施計画における個体群管理の考え方(案)」に基づいて説明した。

#### 【主な意見】

- ・捕獲頭数と混獲頭数を合わせてモニタリングしていて、上限を超えた場合、混獲をしないようにすることは可能か。  
⇒混獲を完全に防ぐことは難しい。  
⇒混獲を防ぐことはできないのであれば、混獲で死ぬことを防ぐようにしないと、絶滅危惧種にならないように管理をしないといけないので、殺すことと殺さずにどうしていくかということも考えなければいけない。  
⇒今回の中間評価の認識としては、昨年は混獲が多かったが、一昨年は特に多くなく、平均すれば想定よりそれほど多いというわけではない。今後も混獲が多い年が続くようになれば、管理計画の中にも考えなければいけないだろう。混獲のコントロールはできないので、人為的な死亡数は管理できる。捕獲枠を調整するという形が現実的であろう。  
⇒混獲と捕獲頭数を分けて管理するより、人為的な死亡を一括して扱っていくのが今後のあるべき姿であると思うので、第3期計画の中でそういう形で運営できればと思う。  
⇒想定していないような不測の事態が起こった場合には適宜対応するというようなものが管理計画の中であればよかったが、今のところ、そういう形はない。例えば、来年度以降も想定以上に混獲が多くなった場合には頭数を調整するというような、年度内の調整もあっていいと思うので、来年度以降検討頂ければと思う。
- ・ジステンパーに関しては、昨年度は全部陰性だったが、近隣国の状況等をみながら、必要に応じて

実施して頂ければと思う。また、ジステンパー以外で致命的なリスクがありそうな感染症が見つかった場合は、ここで議論して頂きたいと思う。